

キング 罪の王

2006(平成18)年11月28日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本・製作＝ジェームズ・マーシュ／脚本・製作＝ミロ・アディカ／出演＝ガエル・ガルシア・ベルナル／ウィリアム・ハート／ペル・ジェームズ／ポール・ダノ／ローラ・ハーリング／ミロ・アディカ (メディア・スーツ配給／2005年アメリカ映画／105分)

……アラン・ドロンばり(?)のハンサムなガエル・ガルシア・ベルナルが、タイトルそのままに近親相姦、兄弟殺し、そして最後には……？ その動機が、単純に父と子の確執とまとめられないところが難しいうえ、解釈の幅が広いのがこの映画のミソ……？ キリスト教における原罪とは？ 旧約聖書の『カインとアベル』の物語の意義は？ 何となく後味の悪いものが残るが、その分いろいろと勉強ネタが増えるかも……。

議論のネタとして格好の素材！

キリスト教を信じる西欧諸国やイスラム教を信じるイスラム諸国の人々の宗教心に比べると、日本人は宗教的慣習や道徳には忠実で盲目的だが、その「宗教心」になるとかなり怪しいものがある。2009年から実施される裁判員制度は、アメリカの陪審制とヨーロッパの参審制の間をとったような制度だが、アメリカでもヨーロッパでもその前提にキリスト教があることは、聖書に宣誓することによっても明らか。しかも、キリスト教には「最後の審判」という考え方があり、最後には神が正当な裁きをしてくれるから、所詮人間の世界における「裁判」は仮のものであり、誤っていても仕方がないという大前提がある。

また、キリスト教には「原罪」という概念があるが、そもそもそれ自体日本人にはわかりづらいもの。また、旧約聖書の『カインとアベル』の物語やソフォクレスの『オイディプス王』の悲劇の物語は、そのあらすじは知っていても、それが宗教的に意味するものについての理解はかなり不十分。そんな日本人にとって、

この映画はそんなテーマを議論するネタとして格好の素材……。

近親相姦にもいろいろ……？

11月16日に観た『僕は妹に恋をする』（06年）は、双子の兄妹の一線を越えてしまった恋を描いたものだが、本作が描く異母兄妹の近親相姦の罪深さに比べれば、所詮少女コミックの世界……？ 主人公エルヴィスがデイヴィッドの娘マレリーに近づいていったのは、必ずしも「父親への復讐」という意識ではなく、純粋な愛情のため……？ 夜中に、デイヴィッドの家屋敷に入り込み、マレリーの部屋の中でエッチするという大胆さ（無謀さ）にもビックリだが、マレリーから「妊娠した」と打ち明けられた際、即座にマレリーの手を握り、「産んでくれ」と言う姿にもビックリ。状況を客観的に見つめればヤバイことは明らかだが、16歳のマレリーはもちろん、それなりの分別ができているはずの年のエルヴィスも、ひょっとして「恋は盲目」になっているの……？

兄弟殺しも平然と……

デイヴィッドの息子ポールは父親と同じく牧師を目指して神学を専攻している優秀な若者だが、「ダーウィンの進化論」を否定し、生き物はすべて神の創造物であるとする「原理主義」を信奉している。そのため大学でも、そのカリキュラムを設けるように訴えるなど、その行動はかなり過激で盲信的……。もちろん、私生活は禁欲的でビールも飲まず、その点はエルヴィスの自由な生き方とは好対照……。

そんなポールが、夜中に屋敷内でウロウロしているエルヴィスの姿を目撃したのだからたまらない。エルヴィスが滞在しているモテルを訪れたポールは、「2度と屋敷に入ってくるな。わかっているな」と言い放ったのは当然……。これに対するエルヴィスの反応がすごい。この映画はエルヴィスのセリフがきわめて少ないのが1つの特徴だが、このシーンにおいてもエルヴィスはそれに対して弁明や反論をすることなく、食事に使用していたナイフを握ったかと思うと、それをいきなりグサリとポールの腹へ……。後にこの犯行をマレリーに説明する時、エルヴィスは「殺すつもりはなかった」などと弁解しているが、それは真っ赤なウソ……？

父と息子の再会が悲劇のはじまり……

デイヴィッドにとってポールは期待の星。牧師になる前は多少の過ちはあったとしても、牧師になり教会を主宰している今は、美しい妻トゥワイラと2人の子供に恵まれ、神に感謝しながら幸せな生活を送っていた。ところが、そこに突然エルヴィスが出現したため、その生活は大きくサマ変わりすることに……。

海軍を退役し、父親に会いたいとエルヴィスが願ったのはなぜなのか？ この映画はそれを解説するヤボは犯しておらず、その解釈は観客の自由に委ねられている。私の解釈によれば、そこには何の悪意も敵意もなく、ただ懐かしいだけだったのでは……？ ところが、一見やさしくエルヴィスを迎えたデイヴィッドの内心は全く逆で、「やっかい者が現れた」というものだった。なぜなら、エルヴィスは金で買った女がたまたま産んだ子だから、汚れた過去の産物……？ したがって、デイヴィッドが「2度と家族の前に現れないように」とクギを刺し、家族にも「2度とあの男とは会わない」と命じたのは当然。しかし、この父と息子の再会が悲劇のはじまりになろうとは……。

父の苦悩のサマは……

ある朝、突然ポールがいなくなった。多感な年頃の青年が父親に反発して「ブチ家出」をするのは、世間でよくある話。「事件性」が見つからないポールの失踪について、警察は真剣に捜査しようとせず、「しばらく様子を見よう」と言うだけ……。これに対するデイヴィッドの苦悩のサマが実に興味深い……？

当初デイヴィッドは神に対して、1日も早く息子が帰ってくることを祈っていたが、何の手がかりもないまま日が過ぎていくうち、次第にいらだつようになり、時には神への不満も……？ しかし、さすが人を宗教的に導く牧師サマ、そんな自分の考え方の過ちに気づいたデイヴィッドは、その後「息子の行方を神に委ねます」という心境に至るとともに、それまで疑惑の目を向けていたエルヴィスに対してもやさしく接するようになり、遂には息子として家の中に迎え入れようと決心するまでに。さらに、教会のミサでの信者たち全員に向かって、大胆な告白も……。こんなデイヴィッドの苦悩のサマがこの映画の見どころの1つ。

他方、こんな風に息子として家族の中に迎え入れられたエルヴィスだったが、それを側でじっと見ているマレリーの気持は……？ そして、すべての罪の原因が自分にあることを十分に認識しているエルヴィスの気持は……？

アラン・ドロンよりも罪深いガエル・ガルシア・ベルナル……？

ルネ・クレマン監督の『太陽がいっぱい』（60年）はアラン・ドロンの代表作だが、当時彼は24歳の美青年。ところがそのタイトルの明るさや彼の美貌とは裏腹に（？）、この映画は貧乏なアメリカ青年トム・リプレイが大金持ちの青年フィリップを殺してなりすまし、富はもちろんその恋人さえも奪ってしまうという「罪の王」ぶりを描いたもの。1960年代はそれだけで十分「罪の王」だったが、21世紀のホンモノの「罪の王」（？）では、主人公の美貌ぶりや知的かつクールに悪事の数々をこなすサマは同じだが、その罪深さの程度が質的に大違い……。したがって、ガエル・ガルシア・ベルナルの方がずっと罪深い……。

懺悔すればすべて終わり……？

この映画でのエルヴィスの「罪の王」ぶりはすごい……。マレリーとの近親相姦、ポールの兄弟殺しを内緒にしたまま、表面上実にいい子ぶってデイヴィッドの家族の中に入り込んだエルヴィスは、マレリーとの肉体関係が続けながら、デイヴィッドの妻トゥワイラの心も少しずつ開いていった。しかし、エルヴィスのように「罪の王」になれないマレリーの苦悩は深まるばかりで、遂にある日いたたまれなくなったマレリーは母親に対して……？

2階の部屋の窓から庭で展開されるそんな様子を見ていたエルヴィスが、そこで下した決断と行動は……？ それはまさに罪の王でなければできない残忍なもの。そして、さらにすごいのがこの映画の結末。1人教会にいるデイヴィッドのもとへ向かったエルヴィスが、デイヴィッドの前で言ったのは「私の罪を懺悔したい」ということ。マレリーとポールの父親であり、トゥワイラの夫であるデイヴィッドに対して、エルヴィスが懺悔する内容とは一体ナニ……？ そして、牧師としてそれを聞かなければならないデイヴィッドのそれに対する反応は……？ 映画はその判断のすべてを観客に委ねているが……？ 2006(平成18)年12月1日記